



281号

2023/3

日中文化交流市民サークル'わんりい'
町田市三輪緑山 2-18-19 寺西方
〒195-0055 ☎ : 044-986-4195
<http://wanli-san.com/>
Eメール:t_taizan@yahoo.co.jp



伝統的な衣装姿のギャロン・チベット族の婦人：この衣装は数百年受け継いでいる年代物で、背景の民家が有る集落は800年の歴史が有ります。昔美人の婦人の頭上に梨の花が咲いていましたので、正倉院の樹下美人図を思い浮かべながら撮りました。（四川省丹巴 2001年3月 撮影：姑娘山自然保護区管理局特別顧問 大川健三）

'わんりい' 2023年3月号の目次は20ページにあります

この言葉は、論語「述而篇」十七にある言葉ですが、日本語ではそのまま四字成語としてはありません。あえて言えば、「寝食を忘れる」という言い回しでしょうか。

・>・>・>・>・>・>

孔子は、自分の夢見る社会を作るために、一生努力を重ね、ついに儒学を創設し、多くの人々の尊敬を集めました。生前は、活躍の場を求めて、弟子たちを引き連れて諸国を渡り歩きました。

その日、彼ら（孔子と門人たち）は楚の国の葉県にやって来ました。葉県の知事は孔子のことを良く知らなかったため、孔子の弟子である子路にこっそりと、孔子とはどんな人かと訊ねました。この質問に子路は答えに窮してしまいました。

後でこのことが孔子に知れると、孔子は子路に対して言いました：

「こののち、もし又他人に私（孔子）がどんな人間かと訊かれることがあったら、こう答えなさい。『孔子という人はね、勉強することがあると食事も忘れ、弟子の教育には休むことも忘れ、真理の探究には自分の年も忘れてしまう人だ』と」

言葉の意味：寝るのをわすれ、食事も忘れてしまう、何かに熱中して寝食を忘れてしまう状態。

使い方：彼は本を読みだすと夢中になり、寝食を忘れてしまう。

・>・>・>・>・>・>

昔、孔子の教えを知るには「論語」という本を読むべきだ、と聞いた時、「論語」とは孔子が書いた、儒教の真髄を説いた論文だと思い込みました。そ

れが、実際は孔子が著したのではなく、その教えを引き継いだ人々が、300年もの長い時間をかけて散逸した教えを一つに纏めたものだったのです。

孔子の教えは、法家思想を掲げて中国を統一した秦の始皇帝から目の敵にされ、焚書坑儒の策により、世の中から消えてしまいました。しかし短

命に終わった秦朝の後の戦乱を収拾して再び中国を一つに纏めた漢王朝は、中国全土をくまなく探し求めて、難を免れた「論語」を集めました。この時既に「論語」は細部が違っていたり、篇数に多少が有ったりで、3つのテキストが出来上がったそうです。それから2000年の間に、いろいろな学者が様々な解釈をしたり論証したりして、またそのテキストの違いを研究して立派な書物が出来

ました。学問の世界では、「論語」の研究は興味の尽きないテーマなのだそうです。

一方で「論語」は又、日本の江戸時代には寺子屋の教材として使われ、子供たちが大きな声で「子宣わく友遠方より来たる。亦嬉しからずや」などと丸暗記しながら徐々に覚えて行ったようです。

初めは何も分からなくても、口が覚え馴染んでいきます。折に触れ先生が話して下さる孔子様のお話を聞くうちに、言葉の深い意味も自然に理解できるようになるのでしょう。昔のことですから、寺子屋に通った期間は短かったのですが、そこでの「論語」の勉強が心に残り、長い間に、日本人の大本の考え方を形づくって行ったのだと考えられます。

そう考えると、幼児教育というのは、国の将来を左右する大切な事業ですね。



挿絵：満柏画伯

李清照の〈詞〉声声慢(下)

桜美林大学名誉教授 植田渥雄

(前号からの続き)

mǎn dì huánghuā duī jī qiáo cuì sǔn
 滿地黃花堆積 憔悴損
 rú jīn yǒu shuí kān zhāi
 如今有誰堪摘
 shǒu zhe chuāng ér
 守着窗兒
 dú zì zěnsēng dé hēi
 獨自怎生得黑
 wú tóng gèng jiān xì yǔ
 梧桐更兼細雨
 dào huāng hūn diǎn diǎn dī dī
 到黃昏 點點滴滴
 zhè cì dì zěn yí gè chóu zì liǎo dé
 這次第 怎一個愁字了得

* 满地=あたり一面。* 黄花=菊の花。* 憔悴損=やつれ果てる。* 如今=いま。* 有誰堪摘=誰が摘み取るというのか(反語)。菊花は旧暦9月9日重陽の節句に、酒に浸して飲む習慣があった。* 守着窗兒=窓辺に寄る。* 怎生=如何にして。* 得黑=日暮れのひと時を過ごす。「黒」は暗くなる。日が暮れる。* 梧桐=梧桐。アオギリ。* 更兼細雨=小雨が交じる。「梧桐雨」は晩秋の寒々とした情景を表わす。白居易『長恨歌』に「秋雨梧桐落葉の時」とある。* 點點滴滴=滴り落ちる。* 這次第=この状況。この心境。* 一個愁字=「愁(しゅう)」の一字。秦観『減字木蘭花』に「過盡飛鴻字字愁」とある。* 了得=それで良しとする。それで済まされる。

[訓読]

地に満ちて^{こうかたいせき}黄^{しゅうすい}花^{そこ}堆積す 憔悴して損なうも
 如今^{じよこんたれ}誰か有^つりて摘むに堪^たえん
 窓^{まどべ}兒^{まも}を守^{まも}りて
 独^{みずか}り自^{いかに}ら怎^く生^えか黒^くる^えるを得^えん
 黃^{こうこん}昏^{ごとう}に到^{さら}りて 梧^さ桐^{さいう}は更^かに細^か雨^かを兼^かね
 點^{てんてん}點^{きてき}滴^こ滴^{しだい} 這^この次^{しだい}第^{だい}
 怎^{いかに}で一個^{しゅう}の「愁」^{しゅう}の字^{つく}にて了^えし得^えん

庭一面を落英が覆い、盛りを過ぎた菊の花は見る影もなく萎れ果てた。重陽の節句はとっくに過ぎたというのに、共に花を摘み取り、菊酒を祝う相手もないまま、庭は荒れ、秋は深まる。独り窓辺に寄り添い、この侘しい日暮れのひと時をどう過ごせというのか。霧雨は梧桐の葉に降りかかり、黄昏時にはぽた

ぽたと滴り落ちる。様々な思いがよぎる。故郷を追われた辛さ、悔しさ。独り身の寂しさ、亡き夫への思慕の情、これら全てを、どうして「愁」の一字で言い尽くすことができよう。

勝手に言葉を足して意識すればこんな情景になるでしょうか。

[和訳]

庭一面にうち積もる
 萎れ果てたる菊の花
 今や摘み取る人も無く
 独り窓辺に身を寄せて
 暮れゆく時を如何で過ごさん
 梧桐に降りし霧雨の 黄昏てより
 滴りぬ この心情
 如何で尽さん「愁」の一字に

この作品で目に付くのは、重ね字のほか、俗語表現を多用しているところです。

「将息」(安息する)、「怎敌他」(とても敵わない)、「守着窗兒」(窓辺に寄る)、「怎生」(如何にして)、「黒」(日が暮れる)、「這次第」(この次第。この状況)、「怎～了得」(どうして～で済ませようか)。

これらの語は宋代以後の通俗小説や元曲に多用されていて、当時の口語と考えられます。中には禅語として日本に入って来ているものもあります。また、そのまま現代口語として通じるものもあります。

それだけに旧来の漢文訓読には馴染みませんね。

〈詞〉のルーツは通俗歌謡にあるので、一般に俗語の使用は珍しくありませんが、この作品は特にそれが目立ちます。ただ俗語といっても通俗性を特に意図したものではなく、自然に沸き起こる情念を自分の内面に強く訴えかける手段として、敢てこの手法を選んだものと思われまます。

俗語であっても、いや、俗語であるからこそ、読むほどに読者の心を打つのはそのためでしょう。

『古詩十九首』之一

報告:花岡風子

今月のお題は「行行重行行」で始まる有名な古詩でした。表題はなく、『古詩十九首』之一と呼ばれています。初頭の一句を題名の代わりにすることもあります。ここで言う〈古詩〉とは音楽から独立した詩のことで、それ以前の楽曲を伴う〈楽符〉と区別されます。また1句の長短が一定していない〈楽府〉と異なり、すべての句が五言で構成されているので五言詩の原型ともみられています。19首の詩が一つにまとめられていて、その冒頭の一首が今回取り上げられたものです。

これら19首の詩は梁の武帝蕭衍の長男、昭明太子蕭統が編纂した中国最古の詩文集『文選』に収められています。蕭統はたぐいまれなる天才で、3歳で『論語』『孝経』を読み、5歳で五経を全て読破したと言われていました。蕭統の傍には優れた文人が集まり、文人たちの協力を得て、名文を集めた『文選』が出来たそうです。しかし残念なことに昭明太子は帝位を継ぐ前に早世し、その後、梁も滅びてしまいます。

1500年以上も前の中国で、事実上一代かぎりでも散った短命な梁王朝でしたが、後の王朝では、この『文選』を手本として詩文が栄えました。そればかりでなく、海を渡って日本にも伝わり、平安時代の貴族たちがこぞって暗唱したそうで、日本文化に与えた影響も大きかったことを思うと、一人の人間の真摯な志と、それを支えた有名無名の人々の仕事の偉大さに感動を覚えずにはいられません。

『古詩十九首』が、梁の時代に詠み人知らずの古い詩としてこの『文選』に収録されたということは、それより前の前漢もしくは後漢代に書かれたものということになります。今回取り上げた『古詩十九首』之一は男女の別れを描いた詩で、一般には遠く旅立ったまま帰らない夫に対する妻の思いを綴ったものとされています。また取り方によっては、前半は男性から女性へ、後半は女性から男性への気持ちを書いているとも読めます。ひとまず後者の設定に従って解釈してみましょう。

xíng xíng chóng xíng xíng	yǔ jūn shēng bié lí
行 行 重 行 行	与 君 生 别 离
xiāng qù wàn yú lǐ	gè zài tiān yī yá
相 去 万 余 里	各 在 天 一 涯
dào lù zǔ qiě cháng	huì miàn ān kě zhī
道 路 阻 且 长	会 面 安 可 知

hú mǎ yī běi fēng	yuè niǎo cháo nán zhī
胡 马 依 北 风	越 鸟 巢 南 枝

冒頭からいきなり、「行行重行行」と、「行」の字が四つも重なり、強烈なインパクトを感じさせます。やむを得ない事情があって、愛する君(妻)からどんどん遠ざかっていく夫の姿が目には浮かびます。万里という距離は、当時の人々にとっては天地の果てに相当する距離です。しかも道は長く険しい。こんなに離れてしまったのでは、容易に再会することはできない。北国の馬(胡馬)は北風に寄り添い、南国の鳥(越鳥)は南側の枝に巣をつくとされるように、誰もがみんな故郷を懐かしがるものだ。

もし二句目の「君」を妻から夫への呼びかけと解釈すると、立場は逆になり、遠く旅立っていく夫に対する妻の気持ちということになります。何れにしろ離れ離れになった二人の関係を表す出だしになっています。

xiāng qù rì yǐ yuǎn	yī dài rì yǐ huǎn
相 去 日 已 远	衣 带 日 已 缓
fú yún bì bái rì	yóu zǐ bù gù fǎn
浮 云 蔽 白 日	游 子 不 顾 反
sī jūn lìng rén lǎo	sù yuè hū yǐ wǎn
思 君 令 人 老	岁 月 忽 已 晚
qì juān wù fù dào	nǚ lì jiā cān fàn
弃 捐 勿 复 道	努 力 加 餐 饭

後半はひたすら、夫を見送った女性の気持ちが綴られています。別れた日々はますます遠い過去となり、独り取り残された私は日に日に着物の帯が緩くなるほど瘦せ細っていきます。浮雲が白日を覆うように消息も分からず、旅に出たあなたは一向に戻ってこようとしません。あなたのことを思いながら、どんどん老けていく私。いつのまにか今年もまた暮れていきます。たとえあなたが私を捨てたとしても、恨言は言いません。しっかり食事をとって元気でいて下さい。

最後の一句「努力加餐饭」は相手の健康を気遣う言葉として、当時使われていたようです。「しかし最後の一句は、相手を気遣ってたくさん食べてと言っているようで、案外そうでないのかもしれませんが。愚痴なんかこぼすのはやめにして、私は私で大いに食べて太っちゃおう、ということかもしれませんね。こういう解釈もあるようですが、皆さん、どうでしょう」。植田先生の解

説に一同ドッと笑い声を上げました。

それからもう一つ。「浮雲」とは、ここでは、離れて行ってしまった夫の陰にいる愛人のことを暗喩しているとも取れます。李白は『登金陵鳳凰台』〈金陵の鳳凰台に登る〉の中で、この「浮雲蔽白日」を典故として引用し、「总为浮雲能蔽日 長安不見使人愁」（総て浮雲の能く白日を蔽うが為に、長安は見えぬ人をして愁えしむ）と詠んでいます。この“浮雲”とは、李白をねたんで宮廷から追い出した玄宗皇帝の側近たちを指していますので、邪魔な存在、と言った意味で使われているようです。

私も最初、この詩を一人の男性が女性への思いを詠ったものと勝手に想定して読もうとしたのですが、やはり、「浮雲蔽白日 遊子不顧反」という表現をわざわざ使っているの、あれ？ となりました。やはり、旅に出た夫が長旅を口実に故意に帰ってこようとしないう、つまり、第三の人がいるんだなあ、と理解せざるを得なくなります。この場合「不顧反」はただ「帰らない」というだけでなく、「帰ろうともしない」という意味に取れます。（「反」は「返」に同じ）。「痛烈な皮肉かもしれないですね。あまり穿った見方をしてはいけなかもしれませんが、読む人の想像力を掻き立てるのがまた漢詩の魅力ですね」と植田先生。

この女性は夫に第三の人がいることを風の便りに耳にしたのかもしれませんが。あるいは女の第六感で感じ取ったのかもしれませんが、手紙すらまともに交わせない時代に、愛する人を待つ気持ちの切なさはいかばかりだったでしょう。ですが、最後の聯にある「弃捐无复道」の「弃捐」を、「あなたに棄てられる」の意味に解して「捨てられても恨みますまい。（私のことはいいから）あなたはたくさん食べて元気でいてください」と解釈すると、教科書的解釈としては申し分ありませんが、あまりにも切なさすぎますね。「もうあんたに対する恨みつらみなんかさらりと捨てて、私はモリモリ食べて元気出すわよ～」と解釈するとちょっとしたコメディのようで、笑えちゃいますね。見えてくる女性の姿も、やせ細り哀愁漂う美女から、たくましい女性像へと変身してしまいます。シビアな出だしだけに、後半をコメディにしたい気持ちもありますが、相手のことばかり考えてやせ細っていく美女の姿は時に痛々しすぎるので、たとえ今回は美女のイメージを棄てても、明るい結末を選ぼうかな、という気になりました。植田先生は、「同じ詩を何度読んでも、その時の心境が詩の

解釈に影響するものです。例えば読む人のその時の気持ちがこの詩の受け止め方にも影響するかもしれませぬねえ」とおっしゃいましたが、詩の解釈はその時の気分がいい。そのくらい自由な楽しみ方のできるどころがまた漢詩の魅力だったりします。

以前『玉台新詠』という同時代の詩集にあった「山に上りて蘼蕪を採る」という詩を鑑賞したことを思い出しました。この詩は、なんと離婚した二人が山菜を取りに行った山でばったり出くわし、女性の方から先に「今の嫁さんどうですか」と声を掛けます。バツが悪いのか、男は「今も悪くはないが、前のはもっと美人で、よく働いてくれたね」と、言い訳とも愚痴ともつかぬ言葉並べて、この詩は終わり。読んだ後は「何だこりゃ？」と思いましたが、何度も読むうちに笑いがこみあげてくるようなコミカルな詩です。

『玉台新詠』は『文選』の少し後に編纂されたものと分かりました。南朝陳の徐陵（507～583）の撰と言われますが、実際には、南朝梁の簡文帝蕭綱（蕭統の弟）が皇太子（東宮）時代に近侍の臣であった徐陵に命じて編纂したものとされているのです。つまり、時代を同じくして編纂された詩文集だったのですね。「行行重行行」という何とも重苦しい一句で始まるこの詩ですが、「山に上りて蘼蕪を採る」と重ねてみると、あっけらかんとした明るくしたたかな古代の男女の姿も見えてきたりして、それに救われるような気もするのは私だけでしょか？

行き行き重ねて行き行く

君と生きながら別離す

相去ること万余里

各々天の一涯に在り

道路は阻しく且つ長し

会面安んぞ知るべけん

胡馬は北風に依り 越鳥は南枝に巢う

相去ること日に已に遠く衣帯日に已に緩む

浮雲白日を蔽い 遊子顧反せず

君を思えば人をして老いしむ

歲月忽ち已に晩る

棄捐復た道う勿れ 努力して餐飯を加えよ

中国の歴史年表を見ると、「晋」という国が三回出て来る。まずはBC11世紀頃興りBC376年に亡んだ国である。その時の晋は、山西省の省都である太原市を通り最後は黄河中流域に流れ込む「汾河」の流域の盆地を中心に山西省一帯に勢力圏が広がっていた。晋という国名は汾河の支流である「晋水」にちなんだものと言われる。今の山西省の別称を「晋」としているのもここから来ている。少し横道にそれるがコーリャンを主原料にした有名な蒸留酒である「汾酒」は山西省汾陽県杏花村の産である。なお山西省は、太行山脈の西側に位置することから由来する。杏花村と言えば、すぐ杜牧の「清明」を思い浮かべる。参考までにここに記すと――

清明

清明时节雨纷纷
路上行人欲断魂
借问酒家何处有
牧童遥指杏花村

この詩は杜牧が左遷された江南の地で詠んだものようである。その時は杏花村では度数の高い蒸留酒は作られていなかったらしい。しかし山西省の杏花村はこの詩を町おこしのシンボルにしたためか、いつの間にか杏花村は汾酒と結びつき中国国内には杏花村と言う地名はいくつもある中で汾酒と言えば山西省の杏花村の産となった。

さて、次の晋は魏・蜀・呉の三国時代は最終的に魏に一本化されたが、魏の第5代皇帝の元帝から禅譲された司馬炎(236年～290年)が265年に建てた国名が「晋」である。この晋も洛陽に置いた都を匈奴に囲まれて一族が皆殺されて316年に滅んでしまった。ただ一人難を逃れた者がいた。それが琅邪王の司馬睿である。彼は地元の豪族の王氏に助けられて建康(今の南京)に都を移し420年まで東晋(317年～420年)として残った。これ

以前の晋を西晋(265年～316年)と呼んでいる。三度目は、唐の滅亡後の混乱時代、五代十国時代の五代の中の「後晋」(936年～946年・首都=開封)である。後晋はわずか10年で契丹に滅ぼされた。

前段が長くなったが、今回ご紹介する美人は最初の晋の第19代皇帝・献公(在位=BC676年～BC651年)の寵姫となった「驪姫(?～BC651年)」である。今から約2700年前のことである。献公は十七の国を併呑し、三十八の国を服属させた人物である。彼女はその中の一つ、西方の異民族である「驪戎」の娘であった。「驪戎」は五帝時代から戦国時代にかけて中国の西方に住んでいた遊牧民であるが、中国の歴代王朝にたびたび侵入しては略奪を行っていた。献公は帝位に就いて5年後のBC672年に驪戎の征伐に向かって打ち負かしたが、その時見た美しい女性に目を奪われてしまう。最終的に驪戎は、献公が所望した驪姫とその妹の「少姫」を献上することで和解した。多くの戦いで勝利し領土を拡げ、晋を強国にした男でも、美人には弱く驪姫に溺れて行き、国を混乱に陥れたのである。ほどなく驪姫は男の子を産んだ。名前は「奚齊」と命名した。また妹の少姫も男の子を産み、名を「卓子」とした。

中国の歴史を見ると、皇后が男子を産み、皇太子としているにも拘わらず側室が男子を産むと何



「春秋晋国故事連環画系列叢書4:驪姫乱政」挿絵から。

楊霜韋 繪 山西人民出版社(2010年)

とかして我が子を太子に就けたいと画策し騒動に発展する例がいくつか見られるが、驪姫もご多分に漏れず何とか我が子を太子にと強く強く思うのである。

ここで献公の子供を見よう。子は6人で、秦の穆公の夫人となった「穆姫」の他5人は男子である。まず齊姜の子の「申生」であるが、彼が最初の男子であり周囲から太子となると思われていた。次に晋の大夫の狐突の娘である大戎狐姫が産んだ「重耳」、後の文公で春秋五覇の代表格となった優れた人物である。妹の小戎子は「夷吾」を産んだ。後の恵公である。そして驪姫が産んだ奚斉と少姫が産んだ卓子である。以上紹介した中で没年を見ると、献公・驪姫・奚斉・卓子の4人がBC651年となっている。つまりお家騒動が予感されるのである。その中心人物は驪姫である。献公は驪姫を愛するあまり彼女の言うことは何でも聞き入れた。そのうち献公は太子の申生を排して奚斉を太子に就けようと思つたのである。驪姫はまず策謀を巡らし申生を亡きものにした。申生派の重臣は殺害したり遠ざけて行った。重耳と夷吾は身の危険を感じ、逃亡し特に重耳は長い放浪生活に入っていく。BC651年に献公が崩御すると、15歳の奚斉が即位したので驪姫は我が子を皇帝にするという目標は達成できたわけだが、10月、申生が太子となるべきと考えていた大夫の里克が即位したばかりの奚斉を刺殺した。相国(宰相)の荀息は卓子を即位させた。ところが11月にまたもや里克が驪姫と卓子を殺害した為、荀息は自殺した。実は、献公が死の間際に荀息に「自分の後継は奚斉だが、若いので重臣が服従しない。そなたに後見役を頼む」と遺言したのである。しかし献公との約束が果たせず責任を取ったのである。BC657年からBC651年までの一連の政変を「驪姫の乱」と言う。美貌を誇った驪姫も因果応報の結末になった。

ここからは後日談である。身の危険を感じて逃亡した、重耳と夷吾のその後である。5人の男子の内、申生、奚斉、卓子が亡くなった今、残るはこの

二人である。里克を中心とした重臣たちはいつまでも帝位を空席にするわけにもいかず、狄という国に逃れていた重耳に使者を立てて帰国を要請した。彼は慎重な男であり、うっかり要請に乗るのは危険だと考え「父上の命に背いて出奔したばかりか、死に際して子としての礼もとらず今更帰るわけに行かない」と言って辞退した。やむなく里克らは梁に逃れている夷吾に迎える使者を立てた。夷吾は秦の援助を取り付け帰国し帝位に就いた。辞退した重耳の逃亡先は次のように転々とした。狄(12年滞在)⇒齊(5年滞在)⇒曹⇒宋⇒鄭⇒楚、転々とした理由の一つは、ある国は冷遇しある国は歓待したことによる。もう一つの理由は、恵公となった夷吾が重耳がじっと動かぬことを不気味に感じるようになり、即位して7年目に重耳の暗殺を企てたのである。いち早くこの企てを察知した重耳は大国の齊にのがれた。齊は歓迎し、妻も得て平穏な暮らしを過ごしたが桓公が亡くなり内乱が起こったのである。そして曹に逃れた。このようにして逃亡生活は19年もの長きに亘った。このように各地を巡るうちに、重耳と言う人物の評判は高まっていった。各国の心ある人は、いずれも「やがてこの人物が・・・」と期待を寄せていたのである。重耳が楚に到って数か月経った頃、恵公(夷吾)が病に倒れた。太子の圉は、父の恵公が秦の援助で帝位に就いたとき、人質で秦にいたのである。圉は父が倒れたのでその跡目を他の者に奪われるのを恐れ、秘かに秦を逃げ出して帰国し懐公を名乗った。秦は背信行為とみなし、秦の穆公は軍を繰り出すと同時に楚にいた重耳に使者を送り次期晋王の座に就くよう要請した。懐公の晋軍は戦意がなく、戦わずして重耳を迎え入れた。逃げ出した懐公は重耳の手の者に殺害された。晴れて晋国の文公となった重耳はまず国内政治を整えた。周囲の情勢もすべて文公に味方し、ついには覇者の座に就いた。わずか9年の治世であるが、以前のような名実ともに大国となったのである。(おわり)

「中原経済区」ふたたび(つづき)

文と写真=村上直樹

新春好！と言うには、かなり遅くなってしまった。今年の春節は西暦の1月22日に当たり、昨年は2月1日であったことから今年も随分早いなあと感じていた。実際、今年の春節は21世紀の100年間で2番目に早かったそうである。最も早いのは1月21日で2061年と2099年の2回、今年と同じく2番目に早い1月22日は他に2004年、2042年、2080年と、計4回である(2023年1月10日付『新華視点』)。因みに来年(2024年)の春節は2月10日である。

近年、春節の時期にはネット上に干支に因んだ画像あるいは動画が溢れ、個人的にも WeChat 等を通じていくつかにいただく。今年は私からも下の写真右のような挨拶画像をお送りした。なんだろう、と後ろを振り返っているこの兎は北宋時代の宮廷画家・崔白が1061年に描いた「双喜図」の一部である(『芸術新潮』2007年1月号、41頁の写真を借用した)。板倉聖哲氏の解説によるとこの「双喜図」は北宋花鳥画の到達点だそうである(写真左が全体)。

当時の都が現在の開封市に当たることから中原(河南省)に結びつく。実物は台北・国立故宮博物院に所蔵されている。残念ながら私はまだ実物を見たことがない。かの「翠玉白菜」が海外初出品されて話題となった東京国立博物館の特別展「台北故宮博物院一神品至玉一」(2014年6月24日~9月15日)にも

来なかったようである(私はこの特別展には6月28日に行き、雨の中3時間ほど並んだ末「翠玉白菜」を拝むことができた)。

さて、ここからは前回(2023年1月号)に引き続いて喻新安氏による2022年12月8日付の河南省関連サイト『豫記』の文章「時隔六年、省委書記重提中原経済区、意味深長」(6年の時を経て、[河南]省[共産党]委[員会]書記がまた中原経済区に触れた。意味深長である)の内容を見ることにしたい。

喻氏によると、21世紀に入ってから中国における地域政策は改革と発展という2つの方面から展開されている。まず、改革の側面とはモデル地区を指定して特定の改革を試行しようというものであり、2005年6月に国により認定された「上海浦東新区」を嚆矢とする。河南省にも、鄭州国際空港を国際的な物流拠点とする改革を目指す「鄭州航空港経済総合実験区」(2013年3月認定)、鄭州・洛陽を中心としてイノベーションの促進を図ろうという「鄭(州)洛(陽)新国家自主创新示范区」(2016年3月認定)、国際間の電子商取引を活性化させるための「跨境電子商務総合試験区」(河南省では2022年11月の時点で、鄭州、洛陽、南陽など5つの市が認定されている)などが存在する。

もう1つの発展という側面はまず、全国的な「経済区」の設立という流れとなった。その狙いの1つは行政区域の垣根を超えた経済活動の広がりを地域の発展につなげようとするものであった。2008年2月に「江西北部経済区発展規劃」が国によって認定され、その後各地に「経済区」が設立された。「中原経済区」が認定されたのは2012年11月である。

すでにこの「雑感」でも触れたように「中原経済区」の核心は「三化」、すなわち「都市(城鎮)化」、「工業化」および「農業近代化」の協調的発展である。やがて、この3つのうち「都市化」を重視する考えが強まった。2014年3月には中共中央と国務院より『国家新型城鎮化規劃(2014-2020年)』が出され、ここでは、「城市群」を中心的な形態として各大中小都市の協調的発展を目指すことが明記されている。な



左は原画。崔白作、双喜図(台北、国立故宮博物院 HP より)
右は筆者の WeChat 用年賀状。「芸術新潮」紙面から作成。

お、ここで新型城鎮化とは農村部から都市部への人の移動と移動先での定住促進を主な内容とする。こうして「城市群」の形成が国の優先課題となったのである。この流れの中で2016年12月『中原城市群発展規劃』が承認されて「中原城市群」が発足し、中原においても「経済区」から「城市群」へと地域政策の重点が移ったのである。

喻新安氏は現・中原経済発展研究院院長の耿明斎氏らと共に「中原経済区」の設立に尽力した一人として、こうした変化を残念に感じているようである。もともと河南省が「中原経済区」の設立を目指すという方針を決めた当時、他の選択肢として「中原城市群」もあった。ただし、当時の「中原城市群」がその範囲を河南省内の9市に限定しているといった理由から、その内容も豊富な「中原経済区」を選んだという経緯がある。

現在の拡大された「中原城市群」は河南省を中心に近隣5つの省に跨るといふ地理的範囲こそ「中原経済区」とほぼ同じであるが(後者に飛び地的に含まれていた3つの県・区——鳳台县、潘集区および東平県は前者には含まれていない) 地域計画としての位置づけは異なる。ともに全国的な経済発展の極の一つとなることが期待されている点は同じであるものの、「中原経済区」は中原地域の特色と優位性を発揮するという点が強調されているのに対して、「中原城市群」は都市機能を充実させることでイノベーション、対外開放、自然保護といった新しい発展理念を貫徹しようとするものである。たとえば、中原地域における農業分野の優位性は城市群構想には直接含まれない。たしかに「中原経済区」という呼称は表に出ることが少なくなりましたが、その実質的内容は依然として重要である。

さらに最近では「現代化都市圏」(近代的都市圏)の形成に国の政策的重点が移りつつある。2019年2月に国家发展改革委員会から出された「關於培育發展現代化都市圏的指導意見」(近代的都市圏の育成發展に関する指導意見)において「都市圏」とは「城市群内の超大・特大城市あるいは周辺へ様々な影響を及ぼす大都市を中心として、1時間の通勤圏を基本的範囲とする都市の空間形態」と定義されている。

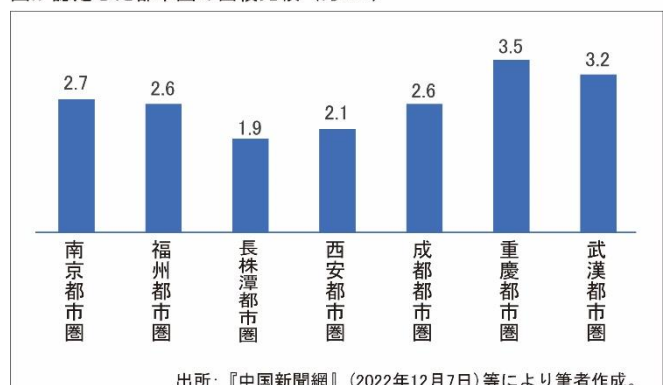
河南省に関しては中心となる大都市は当然、鄭州市であり「鄭州都市圏」構想として国の認定を目指す

ということになる。この「鄭州都市圏」はもともと鄭州市と近隣の4つの地級市：開封市、新郷市、焦作市、許昌市を指していた(1+4)。しかし、2021年12月にさらに、洛陽市、平頂山市、漯河市、済源市(省轄市)の4市を加えた1+8に拡大された。

全国各地の都市圏構想のうち、まず南京都市圏(江蘇省)、福州都市圏(福建省)、成都都市圏(四川省)、長(沙)株(洲)(湘)潭都市圏(湖南省)、西安都市圏(陝西省)、重慶都市圏(重慶市)が国により認定され、7番目がどこになるかに関心が集まっていた。「鄭州都市圏」も7番目の有力候補と目されており河南省の行政当局も売り込みに積極的であったが、残念ながら、昨年(2022年)12月に「武漢都市圏」に先を越されてしまった。中部地域から「長株潭都市圏」に次ぐ2か所目の指定である。

なぜ「鄭州都市圏」が「武漢都市圏」に敗れたか、ネット上でもいろいろ詮索されているが、どうも範囲が広すぎて実態が追い付いていないと見られた点が理由の1つである(2022年12月7日付『中国新聞網』)。「武漢都市圏」構想が生まれたのは2012年である。そこには武漢市を中心とする9つの市が含まれており、総面積は5.8万km²に及んでいた。しかし、その後スリム化が図られ、今回認定された「武漢都市圏」の範囲は武漢市、^{がくしゅう}鄂州市、黄冈市、黄石市の1+3である。その結果、総面積は3.2万km²まで縮小した。一方、「鄭州都市圏」は上述のようにむしろ拡大され、総面積は5.9万km²である。図に示した「武漢都市圏」を含むすでに認定された7都市圏に比べて「鄭州都市圏」はかなり広い。もともと「都市圏」構想は「城市群」では広すぎるため、その中心地域を限定するという意味があったと思われる。国の認定を得るのに有利と考えた「鄭州都市圏」の範囲拡大が裏目に出てしまったようである。

国が認定した都市圏の面積比較(万km²)



中国の面白い神話物語・伝奇物語 (21) -古鏡記 (4)-

顧傑

皆さん、お久しぶりです。

今回で「古鏡記」は最終回になります。主人公王度^{たく}の弟である王績^{せき}が、兄から借りた鏡をもって旅に出て、その道中で鏡が引き起こした不思議な出来事の数々を、帰ってから兄に話しているところからです。

~~~~~

『緑毛亀と白眉猿の一件の後、私は箕山<sup>き</sup>にいき、潁水<sup>えい</sup>に沿って下り、太和（山の名、武当山の別名）を登り、玉井泉という泉へ出て、自然を満喫して歩いた。玉井泉の隣には小さい池があり、その池の水は澄みきっていて底まで見える。地元の木こりの話によると：「この池には神様が住んでいて、祭りのたびに近隣の村々から人々が集まり、お供え物をして村の平安を祈願するのです。もし、この礼拝を怠ると、たちまち池から黒雲が立ち込め、空からは大きな雹が降り、水は堰を越えて溢れ出し、棧橋を破壊してしまうのです。」

その話を聞いて、私は宝鏡を取り出して水池を照らしてみると、淵の水が沸騰して熱湯のように噴き出し、雷のような大きな音がして、突然池の水が空中に盛り上がり、水柱となって二百歩の距離にまで降り注いできた。水柱が地面に落ちた後、私は体長3メートル以上もある魚を見つけた。魚の胴回りは両手でも抱えられないほど太く、頭は赤く、額に白い点があり、体は緑と黄色だった。鱗はなく、ドジョ

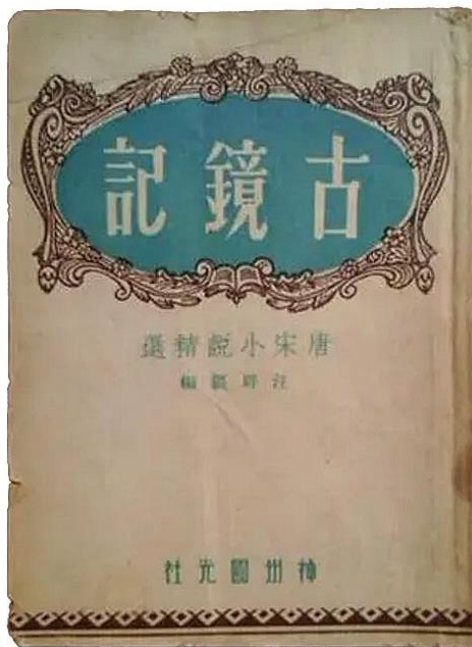
ウのように粘液をまとい、頭は蛇のようで長い。角があり、チョウザメのように口が尖っている。体から弱い光を発しているが、泥に埋もれて泳げなくなってしまったのだ。これは蛟<sup>みずち</sup>といって、竜の一種だが、水から出たら何もできないので、難なく捕まえることが出来た。火で炙って食べてみたら、結構おいしくて、毎日食べ続けても飽きず、数日間食べ続けたが、結局全部は食べきれなかった。

次に、宋汴<sup>そうべん</sup>という処へ行った。地元の資産家である張綺<sup>ちやうき</sup>の家には、病気で毎晩痛みに泣き叫ぶ娘がいて、その声は聞くに堪えないほど荒々しく惨めなものだった。私は、その娘に会って、理由を尋ねてみたがよく分からなかった。

どうやら1年前から体調を崩し、昼間はいつも元気なのに、夜になると毎晩痛みに耐えかねて泣き叫ぶのだと云うのだ。その夜、私は張の家に泊まり、娘の悲鳴が聞こえてくると、宝鏡を取り出して照らしてみた。すると部屋の中で、

娘がなぜか鶏の鳴き声を発し、ベッドの下が異様に光った。光が消えて、よく見ると娘のベッドの下から、大きな雄鶏の死骸が見つかった。それはこの家の家族が7、8年前から飼っていた鶏であることが分かった。

長江の南を旅していたとき、広陵から揚子江を渡っていると、突然、空が暗雲に覆われ、風が吹き荒れ、波が荒れ、船頭は恐怖のあまりパニッ



「古鏡記」汪辟疆編，上海神州国光社(1946)  
「古鏡記」の印刷本はいろいろあります。



作者、王度の故郷近くの今。運城市、鶴雀楼(百度百科から)

クになり、船は転覆の危機に見舞われていた。私は鏡を持って船首に立ち、川面を照らした。すると、たちまち目の前が明るくなり、雲も晴れ、波もおさまった。船頭も落ち着きを取り戻し、しばらくすると船は川岸の緑の丘にたどり着いた。その後、岩を登ったり、洞窟を辿ったりしていると、途中、あちこちに鳴く鳥の群れや、道端にしゃがんでいる熊に出会ったが、宝鏡を取り出すと、みんな直ぐに恐れをなして逃げていった。

ある日、浙江に行くために急いで満潮時に海に出ると、波の音が砕けるような轟音で、何百キロ先までも聞こえている。船頭は、「嵐ががもう近くまで来ているから、これ以上南には行けないだろう。ここで引き返さないと、間違いなく海に吞まれてサメの餌食になる」と言う。そこで、宝鏡を取り出して見ると、近づいてきた嵐に伴う高波が凍ったように動かなくなり、壁のように立ちはだかって、周囲には幅50メートル以上の穏やかな川のような水路が出現した。そこは水も澄んで波もないので、そのまま船を進め、無事南浦に到着した。岸に上がって振り返ると、荒れ狂う波は十数メートルの高さになり、今渡ってきた水路を一気に呑み込んでいた。

そして、天台山にある深い溪谷の洞窟を訪れた。夜、宝鏡を体に貼り付けて谷を渡ると、百歩先まで光が届き、全てがはっきりと見えるよう

になり、枝の上の鳥は強い光に怯えてあちこちに飛び去って行った。

その後、会稽で張という隠者に出会い、古代から伝わる奇門遁甲きもんとんこうの術をいくつか教わった。豫章よしょうという処で徐という道士に会った。徐道士は、有名な仙人の7代目の孫で、剣を踏みながら火を吐く術を知っていると自慢した。

道士との雑談の中で、豊城県の李家には3人の娘がいるのだが、誰も会ったことがない。その娘たちが、今まで聞いたこともない奇病にかかったという話になった。徐道士は彼らを診に行ったが、残念ながら治せなかったという。

私の旧友に趙という優秀な人がいて、豊城県で長官を務めていたので、旅の途中会いに行った。趙が宿を手配してくれると言ったので、私は「李の家に泊まりたい」と言った。趙が手配してくれたので、李家に泊り、主人に娘さんの病気について尋ねてみた。

李の家長は：「三人の娘は皆、母屋の屋根裏に住んでいて、毎日夕方になると、お化粧をして綺麗な服に着替え始めます。」と語り始めた。

「そして着替えたら屋根裏に隠れて、蝋燭もつけず、出てこなくなります。階下から耳を澄ませば、みんなで笑っているような声が聞こえます。朝になっても、呼ばれなければ起きて来ません。毎日きちんと食事をとらず、どんどん痩せていきます。夜屋根裏へ行くのをやめさせようとしたのですが、井戸に飛び込んで自殺しようとするので、どうしようもありません。」

それを聞いて、私は李家長に「娘さんの住んでいる屋根裏に案内してください」と頼み、案内してもらった。

屋根裏の東側には窓があった。ドアは閉めると開かなくなる恐れがあったので、窓が開けられるように細工をして、見た目は以前と変わらないようにしておいた。夕方、李家長がやってき



作者、王度(隋末唐初文学家)の出身地絳州竜門  
(百度百科から)

て、「彼女たちは化粧を終えて、屋根裏に帰っていきましたよ」と教えてくれた。

午前1時くらいになると、話し声や笑い声が聞こえるようになった。私は窓をこじ開けて、宝鏡を持って屋根裏に入り、中を照らした。すると、3人の娘は泣きながら「夫が殺された！」と訴えた。

最初は何も見えなかったが、鏡を明るく照らすとそこには、体長30センチで毛のないピカピカのイタチと、同じく毛のない体重5~6キロもあるネズミ、人の手の大きさで、鮮やかな色のうろこ状の甲羅に覆われ、頭には長さ5ミリほどの角が二つ生えて、5センチ以上ある尾を持ったヤモリがいた。みんな壁の前で死んでいた。それ以来、3人の娘の病気は治った。

その後数か月の間、廬山で生活し、ある時は森で野宿し、ある時は草むらで寝ていると、ジャッカルやオオカミ、トラやヒョウがたくさん出てきたが、私が宝鏡を取り出したとたん、皆怖がって地面に倒れて動かなくなった。

廬山に蘇そという、易経に通じ、過去を見、未来を予言できる博学な知識人である仙人がいたが、鏡を見るとこう言った。

「この鏡は天下の神器、地上に長く留まることはなからう。世界が混乱している今、異国の地に

いるのはあまり安全ではない。宝鏡を手に入れば身を守ることはできるが、早く故郷に帰ったほうがいい」

その通りだと思い、すぐに帰る決心をした。河北まで来たある晩、夢の中で宝鏡が語りかけて来た。

「あなたの兄上は私に良くしてくれましたが、今私は人間界を離れなければなりません。兄上と最後のお別れをしたいので、早く長安に帰ってください」と言うのだ。

朝になって、夢の中の鏡の言葉を思い出し、急いで帰ってきたのだった。兄の姿を見た今、私はようやく約束を果たすことができほっとしている。

しかし、この鏡のような霊力を持った宝物は、最終的に個人の所有物にはならないような気がする』と、長い話を終えるのだった。

数か月後、王績は河東に戻って行った。

久し振りに私の下に帰って来た鏡だったが、大業十三年七月十五日、鏡箱の中から悲し気な音がして、初めは遠く感じられたが、次第に大きくなり、最後には虎や龍の咆哮のようになり、静まるのに長い時間がかかった。静かになってから箱を開けてみると、鏡は跡形もなく消えていた。(完)



唐代の生肖八卦紋銅鏡(百度百科から)

前回(12月号)からの続きです。1992年に「小学館」から発行された、北京・商務印書館との共同編集による「中日辞典」にある、**日:中**記号が付いた語を取り上げています。この記号は、漢字で対応する日本語がある場合、その意味・用法の違いを補充説明するというものです。中国語学習者にとって役に立ちそうなものをピックアップしています。

**【颜色 yánsè】** 1. 色. 红颜色 hóng yánsè/赤色。“色”のみを用いて“红色 hóng sè”とも。“颜色”は話し言葉では“yánshai”とも読まれる。意味は“yánsè”と同じ。 2. (“给……颜色看”の形で) 思い知らせる。ひどい目にあわせる。给他点儿颜色看 gěi tā diǎnr yánsè kàn/彼をちょっぴりこらしめてやろう。

日本語の「顔色：かおいろ・がんしょく」は“脸色 liǎnsè”に当たる。“脸色”は「(健康状態を表す) 顔の色つや」「相手の顔つきに表われた機嫌のよしあし」ともに用いることができる。看人脸色行事 kàn rén liǎnsè xíngshì/人の顔色をうかがいながらやる。听了那话, 父亲脸色丝毫也没变 tīng le nà huà, fùqin liǎnsè síháoyě méi biàn/その話を聞いても父は顔色一つ変えなかった。

“色 sè”は話し言葉では単独では用いず“颜色”とする。話し言葉で単独で用いるときは“shǎi”と発音し、多く r 化する。不变色儿 bú biàn shǎir/変色しない。色子 shǎizi/さいころ・ダイス

**【研究 yánjiū】** 1. 研究(する). 研究自然规律 yánjiū zìrán guīlǜ/自然の法則を研究する。 2. 検討する。考慮する。相談する。这件事我得研究研究一下 zhè jiàn shì wǒ děi yánjiū yánjiū yíxià/このことはちょっと考えてみなければならない。 3. 〈俗〉酒とたばこをさす。“研”は“烟 yān”(たばこ)、“究”は“酒 jiǔ”の音に通じることから。

“研究”は日本語の「研究：けんきゅう」の意味のほかに、「ちょっと考えてみる」「ちょっと問題にしてみる」のような軽い意味で用いることもある。

ちょっと気になるのは、3番の「酒とたばこ」。四川出身の人の話では、以下のような会話で使われるとのこと。

群众：有件事情请帮助解决。(民衆：このことの解決にどうか力を貸していただけないでしょうか)

干部：解决这件事情我们需要研究研究(烟酒烟酒)。(幹部：このことはちょっと検討してみる必要がある

とと思っている、しかし、それには酒とタバコが……)

**【要求 yāoqiú】** 1. 要求する。請求する。希望する。求める。必要(条件)とする。要求发言 yāoqiú fāyán/発言を求める。这项工作要求精神高度集中 zhè xiàng gōngzuò yāoqiú jīngshén gāodù jízhōng/この仕事は精神の高度な集中が要求される。 2. 希望。要求。条件。满足要求 mǎnzú yāoqiú/要求を満足させる。达到质量要求 dádào zhìliàng yāoqiú/質的条件を満たす。

“要求”の語調は日本語の「要求：ようきゅう」ほど強くはなく、「求める」「求められる」「請求する」「…を必要とする」など、より広い範囲で用いる。

強い語調の「要求する」にも“要求”が使われるようで、特に強調したい場合は「強く」や「厳しく」などの副詞を併用するものと思われまます。

**【依赖 yīlài】** 1. 〈贬〉頼る。すぎる。頼りにする。自己应做的事情, 不能依赖别人 zìjǐ yīng zuò de shìqing, bùnéng yīlài biérén/自分でなすべきことは人に頼ってはいけない。依赖思想 yīlài sīxiǎng/他力本願。 2. 依存する。

“依赖”には、人や物に対して依頼心が強いというマイナスの意味で用いる場合と、事物や現象が互いに関連し合い、切り離すことができない関係にあることをいう場合とがある。日本語の「依頼：いらい」は“请 qǐng”“托 tuō”“委托 wěituō”などを用いる。委托人 wěituōrén/依頼人。接受委托 jiēshòu wěituō/依頼を引き受ける。

〈贬：へん〉は貶(けな)し言葉を表し、マイナスイメージの語であることを示します。「依頼心：いらいしん」の「依頼」は「人に頼る」意味があり、“依赖”と同義ですね。

**【一连 yīlián】** 〈副詞〉引き続き。続けざま。一连刮了两天大风 yīlián guāle liǎngtiān dàfēng/二日続けて大風が吹いた。今天一连来了三起客人 jīntiān yīlián lái le sān qǐ kèrén/きょうは続けざまに三回も来客があった。

“一连”は副詞としての用法しかなく、日本語の「一連(の)：いちれん(の)」は“一连串 yīliánchuàn”“一系列 yíxìliè”などを用いる。我们在技术革新运动中创造了一连串的奇迹 wǒmen zài jìshù géxīn yùndòng zhōng chuàngzàole yīliánchuàn de qìjì/われわれは技術革新運動の中で一連の奇跡を生み出した。这个决定可以解决一系列的问题 zhège juéding kěyǐ jiějué yíxìliè de

wèntí/この決定は一連の問題を解決できる。

「引き続いて・続けざまに」の訳としては、単に“一連”だけでよく、“一連地”という形にはしないとあります。つい言ってしまいそうです。また。“一”の声調ですが、“一連”の“一”は変調せず第一声、“一連串”の“一”は変調して第四声、“一系列”の“一”は変調して第二声となるようです。

**【一味 yíwèi】** 〈副詞〉ひたすら、一途に。どこまでも。もっぱら。一味地追求数量，不顾质量 yíwèide zhuīqiú shùliàng, búgù zhìliàng/数量だけを一途に追い、質を顧みない。一味迁就 yíwèi qiānjiù/譲歩ばかりする。一味蛮干 yíwèi mángàn/がむしゃら一点張り。“一味”は主に否定的な事柄を一途に行う場合に用いることが多い。

日本語の「一味：いちみ」は反体制の仲間を意味するが、これには“同伙 tónghuǒ”“帮 bāng”などが相当する。加入同伙 jiārù tónghuǒ/一味に加わる。法西斯匪帮 fǎxīfēibāng/ファシスト一味。また、「一味：ひとあじ」は「一味違う」という語で使われ、他のものには見られない味わいがある、そのものを際立たせるという意味だが、これには“别具一格 biéjùyìgé”“与众不同 yǔzhòng bùtóng”などが相当する。他的做法有点儿与众不同 tā de zuòfǎ yǒu diǎnr yǔzhòng bùtóng/彼のやり方は他の人とは一味違う。

**【意味 yìwèi】** 1. 意味合い。心持ち。意味。语气带有爱慕的意味 yǔqì dàiyǒu àimù de yìwèi/言葉には愛慕の心持ちが現れている。意味深长的一笑 yìwèi shēncháng de yíxiào/意味深長な笑い。2. 味わい。趣味。情緒。意味无穷 yìwèi wúqióng/くめども尽きない趣味。

“意味”は日本語の「意味：いみ」とはニュアンスが異なり、含蓄のある深い意味・味わい・趣などを表す。「意味」は“意思 yìsī”や“意义 yìyì”で訳せる場合が多い。你这句话是什么意思？ nǐ zhè jù huà shì shénme yìsī?/君のその言葉はどういう意味か。每个词都表示一定的意义 měige cí dōu biǎoshì yíding de yìyì/言葉はそれぞれ一定の意味を表している。

**【议论 yìlùn】** 1. 話題にする。取りざたする。議論する。大伙儿都议论着这件事 dàhuǒr dōu yìlùn zhe zhè jiàn shì/みんながその事について取りざたしている。有人在背后议论他 yǒu rén zài bēihòu yìlùn tā/彼のことを陰であれこれうわさしている人がいる。2. 議論。見解。意見。发表议论 fābiǎo yìlùn/意見を発表する。

動詞の“议论”は日本語の「議論：ぎろん」よりもくだけたニュアンスがあり、「議論」は中国語ではむしろ“讨论 tāolùn”に近い。这个问题需要广泛展开讨

论 zhège wèntí xūyào guǎngfàn zhǎnkāi tāolùn/この問題は広く議論を展開する必要がある。

“议论”は「議論」の簡体字です。

**【用意 yòngyì】** 意図。つもり。下心。意味。我这么做的用意你还不明白吗？ wǒ zhème zuò de yòngyì nǐ hái bù míngbai ma?/私がこうする意図を君はまだわからないのか。你说这话是什么用意？ nǐ shuō zhè huà shì shénme yòngyì?/君はどういうつもりでこんなことを言うのか。

日本語の「用意（する）：よいい（する）」は“准备 zhǔnbèi”“预备 yùbèi”などをを用いる。一切都准备好了 yíqiè dōu zhǔnbèi hǎo le/用意万端整った。各就各位，预备，跑！ gèjiù gèwèi, yùbèi, pǎo!/位置について、用意、どん。

今回はここまでにしておきます。

「竹藪焼けた：たけやぶやけた」のように、前から読んでも後ろから読んでも同じ文を「回文：かいぶん」といいますが、中国にも回文があるのでしょ。日中同形語の“回文 huíwén”を調べると、1. 回答文書。2. 回文。3. 回族の使うアラビア文字(言語)。とありました。また、中日辞典の囲み記事“语言游戏 yǔyán yóuxì”(言葉遊び)の中にも“倒顺句 dàoshùnjù”(回文)として中国語の回文が2つ紹介されていました。

水流是不是流水 shuǐ liú shì búshì liú shuǐ/水流は流水か。

枝多叶茂，茂叶多枝 zhī duō yè mào, mào yè duō zhī/枝が多く葉が茂る、茂った多くの葉と枝。

昔から、多くの国で回文が作られていたようです。人々は左右対称のものを美しいと感じ、言葉の中にも左右対称を求めたことから、回文が創作されたということです。中国では4世紀の半ばにはすでに回文の詩があり、日本では12世紀の初めに回文の和歌があったということです。以下に、良く紹介されている現代中国語の回文を載せておきます。

船上女子叫子女上船 chuánshàng nǚzǐ jiào zǐnǚ shàng chuán/船に乗っている女性が息子と娘に船に乗るように言った。

上海自来水来自海上 Shànghǎi zìláishuǐ láizì hǎishàng/上海の水道水は海上からやって来る。

黄山落叶松叶落山黄 Huángshān luòyèsōng yè luò shān huáng/黄山のカラマツの葉が落ち、山は黄色に染まる。

山东落花生花落东山 Shāndōng luòhuāshēng huā luò dōng shān/山東の落花生の花が東の山に落ちる。

花莲喷水池水喷莲花 Huálián pēnshuǐchí shuǐ pēn liánhuā/花蓮の噴水池の水がハスの花を噴き出す。

# 千仏山の伝説

訳：一瀬靖子／大槻一枝

今回の民間伝説の翻訳は、「千仏山の伝説」を取り上げました。千仏山は、中国・山東省の省都である済南市の南部・歴下区にある泰山山脈の北端に位置する標高 285mの低山です。山全体を千仏山公園としており、風光は素晴らしいものがあります。済南市は人口 600 万人超の大都市ですが、市内のあちこちに泉が湧き出る「泉都」として有名です。特に有名な「趵突泉」とこの泉からの水が流れ込む「大明湖」と共に済南三大名勝地となっています。隋代に岩肌に多くの摩崖仏が刻み込まれたことから千仏山という名称になりました。別名を以下の文章内にありますように、歴山、舜耕山などと呼ばれています。山麓に黄金の巨大な弥勒菩薩像が鎮座していてその迫力に圧倒されます。これは日本の和歌山県会が寄贈したものだそうです。それでは以下に本伝説の翻訳文をご紹介します。

済南市城南に位置する千仏山は、その昔歴山と呼ばれ、のちに“舜耕山”“禹登山”“千仏山”などと呼ばれるようになった。なぜ一つの山にこのように多くの名がついたのであるか？ 民間には次のような言い伝えがある。

中国の古代に舜<sup>注1)</sup>と言う首領がいた。彼は二人の妻(娥皇・女英)と共に、済南歴山の麓で農耕をしていた。この一帯の百姓たちは舜等に率いられ、労働に精を出し、楽しく暮らしていた。思いもかけずこの年、村は旱魃に襲われ、九九、八一日もの間、一滴の雨も降らない。青い空には一片の雲もなく、河の水は枯れ、泉の水は湧き出すことを止め、湖水は乾き、井戸は底が見えだした。田畑の作物は皆枯れ萎れてしまった。人々はこの光景にいらだつばかり、何とも手の下しようがない。次々に舜を訪れて救いを求めた。舜と二人の聡明な妻は考えに考えた末、終に良い方法を思いついた。深い井戸を掘り、“絶え間なく流れる黄泉(黄泉の泉)の水を探し当てて、地上に導く”と言うのである。舜は自ら先頭に立ち、夜を日につい

で作業に取り組み、六六、三六日の間に深い井戸を掘り上げた。井戸の水は晴天を映しながら、その元は黄泉に連なる。ゴトゴトと水を吹き上げ、作物、野菜を灌漑し、人や家畜の飲料を賄えた。お天道様が一年雨を降らせなくても、歴山のふもとの人々は心配することなく、いつものように田畑を耕し、種を撒き、除草し、そして収穫にいそしんだ。人も家畜も元気を取り戻し、村はまた五穀豊穡の楽園を取り戻したのである。人々は皆舜と彼の二人の妻に感謝した。

その後、舜は堯<sup>注2)</sup>から天下の管理を引き継ぎ、歴山を離れて江南の視察に赴いた。人々は彼と彼の妻を末永く記念するために、舜廟、娥皇・女英廟を建て、三人の塑像を彫って祀った。また歴山を舜耕山と改名し、また舜と彼の妻たちが人々の先頭に立って掘った泉を、“舜泉”あるいは“舜井”と名づけた。この時から“舜泉”は済南七十二名泉の一つに数えられるようになったという。

その後数十年が過ぎ、舜も年老いた。彼は禹と言う者を選び、天下を彼に譲った。またそのころ、数カ月にわたる厳しい悪天候が続いた。燃えるような日光に山野は煙が立つかと思われるほど乾燥するかと思えば、数十日間豪雨が降り続き、作物も人家も水浸しになってしまった。人々の生活はたちまち苦難に陥った。禹は率先して難儀な作業に当たり、人々と共に日夜治水に奮闘した。家の前も素通りして立ち寄ろうともしない禹の姿に、人々は感動し、心から彼を尊



済南市大明湖の歴下亭 (戦前の絵はがきより)



千仏山の巨大な弥勒菩薩像(中国ニュースサイト中関村在線より)

敬した。そうは言っても、世の中は皆一様ではない。“瓜二つ”と言う言葉はあるが、全く同じ瓜はなく、人の思いも人それぞれであって、中には禹に対して不満を持つ者もいた。東海の水中に巫支祁という化け物がいた。巫支祁はもともと悪い蛟<sup>みづち</sup><sup>注3)</sup>が、長年の修行を経てようやく人間の姿になったと言われるもので、隙さえあれば「天下を我がものに」と企んでいた。彼はかつて舜を訪ね、天下を譲れと迫った。舜は断固これを断った。蛟は舜が天下を禹に譲ったと聞き、怒り狂い、舜に報復を企てたばかりか、禹を亡き者にしようと手ぐすね引いてチャンスを待っていた。間もなく舜はこの世を去った。巫支祁は全力を傾けて禹に立ち向かった。彼は直ちに手下のスッポン、エビ、カニなどを呼んで、「直ちに東海の水を増し、神州(中国)の大地を果てしない大海原にせよ」と命じた。

瞬く間に、暴風は大木をなぎ倒し、波頭は家を破壊した。土地、村落は水びたしになり、人々は行き場を失った。巫支祁は大声で、「早く！ 早く東海に歴山を呑み込ませ、禹が死んでも葬る墓地さえないようにしてしまえ」と怒鳴った。禹は帰る家を失った人々を率いて東岳泰山に登り、自ら筏を組んで歴山に漕ぎつけ、山頂に立って水の勢いを観察した。東に目をやると、東の海は見渡す限り山のような波に覆われている。しかし巫支祁の姿はどこにも見当たらない。そこで彼は魔法の鏡を海に投げ入れ、たちまち巫支祁を発見した。巫支祁はもともと黒蛟<sup>くろみづち</sup>(竜の一種)で、荒波の中に隠れ、牙をむき出し、爪をあらわに暴れている。禹は奮い立ち、身の危険も顧みず水中に飛び込み、巫支祁に一騎打ちをしかけた。一口に禹に食らい

つこうとする巫支祁、一手に巫支祁を仕留めようとする禹。二人の戦いは海を沸かせ、天地は真っ暗になった。禹は巫支祁が水中戦を戦えば戦うほど力を増していくことに気付いた。水中戦は巫支祁のお手のものであった。そこで禹は一計を企て、故意に巫支祁に隙を見せ、定海神針を力いっぱい東海に投げ入れた。海水はたちどころに音を立てながら東海に退き下がった。陸戦の不得手な巫支祁は海水が退いて行くのを見ると急に慌てだし、戦いながら退き、何とかして遠くへ逃げ去りたいと願った。禹はその手は食わぬと、ひたすら彼を追い、最後には鉄の鎖で巫支祁を縛り上げた。

人々は巫支祁が捕らえられたと聞くと、その生皮を剥ぎ、肉に食らいつきたいとどんなに思ったことか！ しかし禹は、「舜帝の英霊<sup>やす</sup>を安んずるために、みな思いは舜泉に閉じ込めておこう」と諫めた。人々は皆この言葉に従った。巫支祁は二つの目をぎよろぎよろさせながら、恨みがましく、「いつ私を放免するつもりか？」と訊いた。禹は笑いながら、

「鉄の木(蘇鉄)に花が開くときさ！ (“蘇鉄に花が咲く”とは中国では実現不可能なことを表す)」

と答えた。愚かな巫支祁は蘇鉄に花が咲かないことも知らず、「そうとなったら俺はその日まで待つ」

こうして蘇鉄は一度も花を咲かせず、水中の怪物(巫支祁)は、じっと舜泉の中に閉じ込められたまま今に至っている。人々は舜泉のほとりに立って、泉の底に大きな鉄の鎖に縛られた黒蛟を見ることができると。この蛟こそ多くの悪さをした水の怪物(巫支祁)である。

禹が水の怪物と戦う前に、かつて歴山に登り、海の状態を観察したことにより、この山は“禹登山”と呼ばれるようになった。後に仏教が中国に伝来し、人々は歴山に寺を建立し岩に彫刻を施し、多くの仏像を安置した。こうして歴山は“千仏山”と呼ばれるようになったという。(李奎元 整理)

#### ■注

- 1)舜：古代中国の五帝の内の一。夏王朝の最初の王である「禹」に帝位を禅譲したと言われる。詳しくは、‘わんりい’第255号(2020年7月号)を参照してください。
- 2)堯：五帝の一人。舜に帝位を渡した。
- 3)蛟(みづち)：神話や伝説に登場する龍類か蛇類



# シューマンとメンデルスゾーン (1)

和田 宏

## <前座としてのワーグナー>

私は、大学生時代は熱狂的なワグネリアンで、読売交響楽団の定期会員になって、コンサートのプログラムにワーグナーを賛美する文章を寄稿し原稿料を貰ったこともあります。歴史的に知られたワグネリアンは多数居ます。その一人、バイエルン王のルートヴィヒ2世は、憧れだったワーグナーを宮廷に招いたり、家を与えて優遇したりし、自らは騎士伝説を具現化すべく中世風のノイシュヴァンシュタイン城を建てました。



ノイシュヴァンシュタイン城(ウィキペディアより)

ワーグナーは、1881年にルートヴィヒ2世に宛てた手紙の中で、“ユダヤ人は純粋な人類にとって生まれながらの敵である”と書いています。ヒットラーは、ワーグナーの信奉者で、ナチ党（国家社会主義ドイツ労働者党）の党大会では、「ニュルンベルグのマイスタジンガーの前奏曲」などを演奏させたりしました。ユダヤ人の有能さを恐れたヒットラーは、1933年にユダヤ人作曲家の音楽の公演をすべて禁止する指令を発布しています。「ワグネル」と言えば、慶応義塾大学には1901年に設立された「ワグネル・ソサイエティー・オーケストラ」や「ワグネル・ソサイエティー男声合唱団」があり、“彼の偉大なる音楽理念に敬意を表して付けた名である”と言っています。最近では、「ワグネル」という名のロシアの民間軍事会社もありますよ。

## <シューマン協会での出来事>

私は50歳の頃、職場の友人から“ワーグナーよりシューマンが良いよ”と勧められ、交響曲を聞いて一遍にシューマニアナになり、「日本シューマ

ン協会」に入会しました。トルストイは、ワーグナーの楽劇を、“やたらごてごてした猿芝居で、音楽でもなければ芸術でもない”と、捨て台詞を残し、演奏半ばにして会場を後にしたのですが、私もトルストイと同じようにワーグナーから卒業した次第であります。

「日本シューマン協会」は、会員同士の情報交換として機関紙「トロイメライ」を発行している他、JR原宿駅近くの喫茶店を借り切って、サロン・コンサートを隔月に開催していました。私は会員だけの上品なサロン・コンサートに参加しました。シューマンについて勉強したり、会員の女性らが備え付けのピアノを自主的に弾いたりするのです。勿論、殆どがシューマンの曲。ところが、ある日、面白いことが起きました。大男が前に出て来て、“リルケの詩を読んで浮かんだ即興のピアノ曲と歌です”と言うなり、ピアノをバンバン、ジャンジャン、滅茶苦茶に弾きながら、歌詞ならぬ“ウオー～、ウオ～”と訳の分からない雄叫びをあげて歌い出しました。皆は、あっけにとられ、ただ顰めっ面をして、“いや～ね、またあの人よ。バカみたい”と呟くばかり。しかし私は、リルケの詩から受けた情念を即興で作曲してピアノを弾きながら、バリトンの美声を轟かせたこの男の演奏に、驚くと同時に大いに感動。男に近寄り、“いやー！ 素晴らしかった。音楽というものが誕生する原点を貴方が教えてくれた気がします。お名前は何とおっしゃるのですか？”と話しかけたのです。すると、男は大喜びして、“私が府中市で経営している幼稚園の顧問として貴方をお迎えしたい。顧問料をお支払い致します”と、その場で言ったのです。私は、“いやいや、別に仕事を持っていますので出来ません”と、あわててお断りしました。そうしたら、彼は自分の歌っている姿を録画したDVDを記念にプレゼントすると言って、私にくれたのです。

この訳の分からないDVDを再生して、私も鬱憤晴らしをしています(笑)。

## <シューマン登場>

さて、本題に入りましょう。ロベルト・アレキサンダー・シューマンは、1810年6月8日、ドイツ東部のツヴィッカウで生まれました。1828年8月、18歳のロベルトは、ピアノ教授のフリードリッヒ・ヴィークの家を訪ねて、ヴィークからレッスンを受けてきました。一方で、その家に居た8歳のクララ・ジョセフィーヌ・ヴィーク（後のクララ・シューマン）や弟らと鬼ごっこやかくれんぼをしたり、お化け話を聞かせたりして、兄妹のような遊び友達となって行きました。

シューマンの母親は、息子のロベルトが経済的に安定している法律家になって欲しいと希望していたため、ロベルトは、一旦はハイデルベルク大学法学部に入學し法律を学んでいましたが、音楽への憧憬が強く、法律の勉強を投げ出し、20歳の時、ヴィークの家を再び訪ねて正式に弟子入りし、音楽の理論などを勉強しました。

クララは、1828年10月、9歳で天才ピアニストとしてデビューし、12歳の時、82歳のゲーテに招かれてピアノを弾き、ご褒美として青銅メダルを授与されたこともありました。シューマンの方は、1831年、ピアノで1オクターブ離れた鍵盤を同時に弾くため、無理やり指を広げようとして木箱に指を縛ったため、右手の指を痛めてしまい、ピアノが満足に弾けなくなりました。

シューマンは、指を痛めてピアノが弾けなくなったことをクララに告白しました。これを聞いたクララは、ロベルトにとって必要な人になればと思い、“大丈夫よ！あなたがピアノを思うように弾けなくても。あなたの作った曲は、みんな私が弾いてあげる。ほかのどのピアニストよりも素晴らしく”と応えました。22歳のロベルトは、“Danke schön！”と言いながら13歳のクララを抱きしめました。兄妹のようだった二人の間に愛が芽生えた瞬間です。

シューマンの音楽は、特にピアノ曲はショパンの様な華やかさや盛り上がり無く、和音の移動が中心で、メロディーらしいメロディーも無く、リズムもしょっちゅう変わるし、聴いていて快感を得るとするのは難しい。それでも、恋をした人間の切ない気持ちや恐れ、不安、嘆き、苦しみなどが

表現されています。私のようにロマンティックでメランコリックな精神の持ち主なら共鳴する音楽と言えるのではないのでしょうか。

シューマンの「トロイメライ（夢）」は、組曲「子供の情景」の7番目の曲で、この優しいメロディーを作

っていないければシューマンが多くの人から愛される作曲家にはなっていなかったかも知れません。

シューマンは、クララと結婚する2年前に、“「あなたは時々子供みたいだ」と君は言ったね。僕はその言葉の余韻の中で、このトロイメライを作曲したんだ”と書いた手紙をクララに出しています。



ドレスデン時代のシューマン夫妻  
(ウィキペディアより)

## <クララとの結婚>

ピアノの上手な、可愛い娘クララを、大金持ちの貴族と結婚させようと願う堅物の父、フリードリッヒ・ヴィークは、情緒的に敏感過ぎ、規範に懐疑的で、生活力の乏しいシューマンと仲良くなることを好ましく思いませんでした。二人の仲を執拗に引き裂き、結婚に反対しました。しかし、この間もシューマンはクララに歌曲を送り、手紙のやり取りを続け、二人の愛が揺らぐことはありませんでした。クララとシューマンは、フリードリッヒを相手取って1839年訴訟を起こし、その結果、1年後に勝訴して結婚が認められました。

結婚式は、1840年9月12日、ライプツィヒにある福音ルーテル派シェーネフェルト記念教会で行われました。ロベルトが30歳、クララが21歳の誕生日の前日でした。参列者は、クララが5歳の時に父フリードリッヒと別れた前妻、つまりクララの産みの母親、マリアンネ・バルギールと、友人でオルガン奏者のエルンスト・ベッカーの計2人だけで、結婚式を取り行ったのがロベルトの幼友達のヴィルデンハーン牧師でした。フリードリッヒは裁判に負けた3年後にシューマン夫妻と和解しています。 つづく

わんりいは、12年前、前回の卯年2011年の1月号にきれいな農民画と素敵な記事を見つけました。筆者の平野理絵さんをお願いして、当時の記事をそのままここに掲載させていただきます。平野さんは上海にお住いの頃、農民画の聖地・金山区で農民画に魅了されて、何度も通い研究され、帰国後にわんりいで農民画の魅力を16回にわたり紹介してくださいました。これは前回のシリーズ最終回のお話です。

## 土の香りのモダンアート・農民画 16

平野理絵

日本/農民画協会

新年好！ 2011年は卯年。

日本ではウサギはその高い跳躍力から出世や目標達成のシンボルとされています。中国でも同じように縁起の良い動物として古来から工芸品の文様に好んで用いられていました。

漢代には翼のあるウサギが瓦などに描かれていたそうで、麒麟などと同様にめでたいしるしとされる霊獣のひとつと考えられていたようです。

さて、ウサギをモチーフにした農民画といえ、この「兎の山」が私はまず頭に浮かびます。パッチワークのように継ぎ合わせた感じの山々を背景に、濃いルビー色のつぶらな瞳のウサギたちがあちこち自由に駆け回っています。よく見ると葉っぱをモグモグ食んでいる様子が描かれています。あの小学校の飼育小屋でキャベツを食べていたウサギの鼻と口のあたりの可愛らしい動きが思い出されて、とっても癒やされます。

全く遠近感を無視した描法がウサギの愛らしい姿かたちを際立たせた作品ですね。

食卓の上いっぱい置かれた食材やご馳走の絵を見ると、とても豊かな幸せな気分になりますが、こんな風に彼らにとってのご馳走がいっぱい生えた山を自由に駆け回るハッピーな面持ちのウ



「兎の山」 画 朱素珍

サギの絵を見ると、やはり気持ちがほっこりして、思わず微笑みます。

農民画は、生活の中の祈りや願いを、こうであったらいいな、という気持ちのままに描かれています。それは思い通りにならない現実を強く生き抜く知恵でもあると思います。現代の私達もその知恵にあやかることが必要かもしれませんね。今年もファンタジーの力を借りて幸せになりましょう。

### ◇満柏画伯の漢訳俳句◇

春の海 ひねもす  
のたりのたりかな  
与謝蕪村

chūn hǎi yōu yōu rì  
春 海 悠 悠 日

bō màn màn cháng  
波 漫 漫 长

【わんりいの催し】  
皆様のご参加を歓迎します

♪ ボイス・トレで日本語の歌を歌おう！

身体の力を抜いて気持ちよく発声しよう！  
声は健康のバロメーター！！

\*動きやすい服装でご参加ください。

- 会場：まちだ中央公民館 美術工芸室
- 日時：3月14日（火）10：00～11：30  
4月4日（火）10：00～11：30
- 講師：Emme [エメ]（歌手）
- 会費：1,500円（講師謝礼・会場費）
- 定員：15名（原則として）
- 申込：☎042-735-7187（鈴木）

~~~~~

*** 中国語で読む 漢詩の会 ***

漢詩で磨く中国語の発音！ 中国語のリズムで読んで漢詩のすばらしさを味わおう！

- 会場：まちだ中央公民館 視聴覚室
- 日時：3月19日（日）10：00～11：30
4月30日（日）10：00～11：30
- 講師：植田渥雄先生
桜美林大学名誉教授
- 会費：1,500円（会場費・講師謝礼）
- 定員：20名（原則として）
- 申込：☎090-1425-0472（寺西）

Email:ukiuki65jpp@yahoo.co.jp
(有為楠)



■ 3月・4月定例会 代表宅

- ▼ 3月9日（木）13：45～
- ▼ 4月6日（木）13：45～

■ 'わんりい' 発送 三輪センター

- ▼ 4月号 3月31日（金）
- ▼ 5月号 未定

☆☆ 編集後記 ☆☆

2023年も、もう3月。昔から云われるように、1月は行き、2月は逃げてしまいました。3月は年度終わりで、卒業や様々な区切りで慌ただしく去って行くのでしょうか。

それでも3月は春。今年は例年になく激しい寒気と暖気の闘ぎあいでしたが、これからは暖気が勢いを増してくることでしょう。至る所に花が咲いて、春風に乗って花の香りが……と、ここまで考えた時、春風が運んでくるのは花の香りばかりでなく、スギやヒノキの花粉も大量に運ぶことに思い至りました。

花粉にアレルギーのある方たちにとっては、辛い季節が始まるのですね。最近が良いお薬もあるようですが、研究が進んでアレルギーそのものがなくなる治療法が見つければいいのに、とつくづく思います。

~~~~~

'わんりい'は、新入会をいつでも歓迎します  
年会費：1800円、入会金なし

郵便局振替口座：00180-5-134011 わんりい  
10月以降の入会は、当年度会費1000円

■ 問合せ：044-986-4195（寺西）

'わんりい' 281号の主な目次

|                         |    |
|-------------------------|----|
| 寺子屋 四字成語(60)『廃寝忘食』      | 2  |
| 「日译诗词」(30) 李清照〈詞〉声声慢(下) | 3  |
| 「漢詩の会」報告『古詩十九首之一』       | 4  |
| 中国の歴史を彩る美人百花(15) 驪姫     | 6  |
| 「中原」雑感(29)「中原経済区」ふたたび   | 8  |
| 中国の神話・伝奇物語(21)「古鏡記」     | 10 |
| 「中日辞典からの意外な発見」(14)      | 13 |
| 「千仏山の伝説」                | 15 |
| 「シューマンとメンデルスゾーン」(1)     | 17 |
| みんなの広場                  | 19 |
| 'わんりい'の催し・お知らせ          | 20 |